（別紙）成果報告書

ＳＰＡＣの中高生鑑賞事業の成果に関する研究

静岡産業大学　経営学部　入江ゼミ
指導教員：准教授 入江眞理
参加学生：西岡那奈子、厚木希瞳、髙橋呉波

１　要約

公益財団法人静岡県舞台芸術センター（Shizuoka Performing Arts Center ： 以下、ＳＰＡＣと表記）による「ペール・ギュント」の公演を鑑賞した県内の中学生、高校生、及び教員を対象にアンケート調査を実施したところ、参加者の評価は極めて高く、生徒に好ましい影響を及ぼしていることが明らかになった。ＳＰＡＣの中高生鑑賞事業は、演劇鑑賞教育の意義を実現しており、感性を刺激し、豊かにする体験であり、想像力と創造力を培うものとしてその成果が確かめられた。今後も教育としての観劇体験であることをふまえ、中高生に向けた丁寧な取り組みを継続されたい。

２　研究の目的

ＳＰＡＣは、「演劇の創造、上演、招聘活動以外にも、教育機関としての公共劇場のあり方を重視し、中高生鑑賞事業公演や人材育成事業、アウトリーチ活動など」に注力している。演劇教育は、①表現・劇づくりなど「創造」の活動、②実演の舞台を観る「鑑賞」の活動、③演劇の特性を活かした教育活動全般の活性化、に意義があるとされている。[1] 本研究においては、人材育成の検証の視点を②の「鑑賞」の活動に定め、ＳＰＡＣの事業のうち中高生鑑賞事業を研究の対象とした。この事業による観劇体験を中高生はどう評価したのか、また、中高生にどのような影響を及ぼしたのか、観劇後に実施されたアンケート調査のデータを分析・検討し、ＳＰＡＣの取り組みの成果を明らかにする。

３　研究の内容

１）研究方法

ＳＰＡＣが例年実施している中高生鑑賞事業の参加者（県内の中学生、及び高校生）を対象としたアンケート調査のデータを分析の対象とした。また、アンケートの内容を補足・確認するため、静岡県内のS高等学校においてインタビュー調査を実施した。

（１）アンケート調査

公演名：ペール・ギュント
公演（鑑賞）日：2022年９月29日～11月11日　（於：静岡芸術劇場）
鑑賞校：14校（中学校７校、高等学校（高等専修学校を含む）７校）
調査の方法：観劇後、パンフレットに同封されたアンケート用紙に生徒・教員が記入し、ＳＰＡＣに返送した。返送されたアンケート用紙のうち有効なデータ（同意を得られたもの）が本研究に提供された。
データ数：生徒1,133名、（中学生569名、高校生564名）、教員69名。
質問項目：ＳＰＡＣの認知度、鑑賞の印象とその理由、観劇の感想・今後観劇したい作品（生徒のみ）、パンフレットの効果と感想（生徒のみ）、鑑賞事業の効果（教員のみ）。

（２）インタビュー調査

日時：2023年１月10日　（於：静岡県内S高等学校）
対象者：高校２年生（４名）
質問項目：アンケートの回答内容のうち、確認したい点について半構造化の形式で面接した（図１）。

図１　インタビュー調査の様子

２）調査結果

（１）ＳＰＡＣの認知度

ＳＰＡＣを知っていた生徒は40.2%、知らなかった生徒は48.7%で、知らなかった生徒が知っていた生徒の数をやや上回った。

（２）演劇鑑賞（「ペール・ギュント」）について

＜鑑賞の印象＞鑑賞の印象について生徒に５件法で回答を求めたところ、図２のとおり、「とてもよかった」が50.5%で最も多く、「よかった」が38.4%、「ふつう」が7.9%、「いまひとつ」が2.2%、「全く興味がもてなかった」が0.9%であった。「とてもよかった」と「よかった」で全体の88.9%を占め、生徒は観劇体験を肯定的に捉えていることがわかった。鑑賞の印象について中学生と高校生を比較したところ、中学生は高校生に比べ「とてもよかった」と回答した割合がやや高かったが、全体として大きな違いはみられなかった。また、性差で分析を試みたが、顕著な違いは見られなかった。

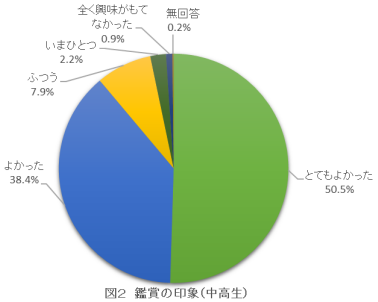

図2 鑑賞の印象(中高生)

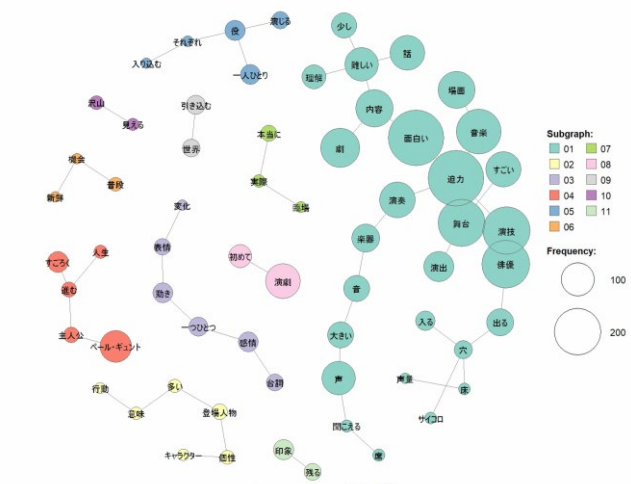

図3 理由

＜理由＞　次に、鑑賞の印象に対する理由の自由記述のデータをＫＨCoder Ver.3を用いて定量テキスト分析を行った。共起ネットワーク（図３）による抽出語の関連性から次のような理由が示された。①舞台、演技、俳優、音楽とその演奏にとても迫力があり、面白かった。②舞台演出が魅力的だった。特にセットの穴から出入りすることや最後に崩れる演出が印象深かった。③内容は少し難しかったが考えながら楽しむことができた。④場面ごとに変わる音楽や衣装が印象的だった。⑤後ろの席まで届く俳優の声の大きさと明瞭さに感嘆した。そのことによって伝わるものがあると感じた。⑥登場人物のそれぞれの個性が明確に伝わってきた。⑦初めて観てとても「すごい」と思った。⑧一つひとつの台詞や動き、表情によって感情を表現していた。⑨世界観に引き込まれた。⑩普段は機会がないため、貴重だと思った。なお、今回の調査では、鑑賞の印象とその理由の間に相関関係は見られなかった。

（３）観劇の感想や気づき

＜感じたこと・気づいたこと＞　共起ネットワーク（図４）による抽出語の関連性から、次のような感想や気づきの特徴が見出された。①演出、俳優の演技力、音楽とその演奏など舞台の迫力を感じた。②一人でいくつもの役を演じたり、楽器の演奏をしたりする俳優は「すごい」と感じた。③俳優の舞台上での移動や衣装の早着替え、台詞をすべて覚えるまでの過程とその努力などへの気づきがあった。④俳優の声の大きさと迫力、明瞭さや表現がとても印象に残った。⑤自分自身と重ね合わせ人生を考える機会となった。⑥劇を創り上げるためには俳優だけでなく多くの人が関わっていることに気づいた。⑦ＳＰＡＣに興味をもち、また観たいと思った。⑧演奏者の息が合っていたこと、音楽がそれぞれの場面に合っており大変効果的だった。⑨「すごろく」のしかけに驚き、意味するところを考えさせられた。

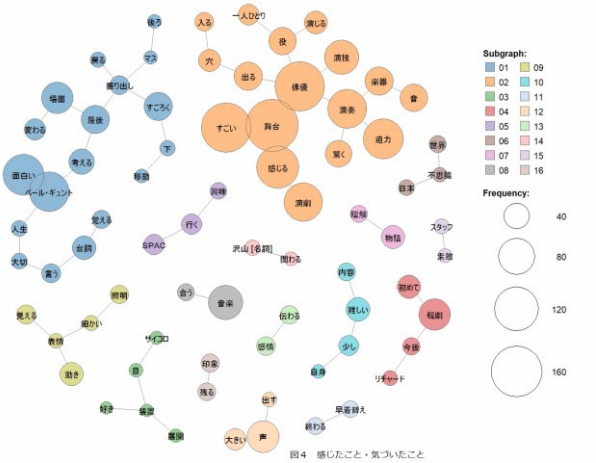

図4 感じたこと・気づいたこと

（４）パンフレットの役立ち度

＜パンフレットは役に立ったか＞

観劇の当日に配布されたパンフレットについて、作品を楽しみ、理解するのに役に立ったか４件法で回答を求めた。その結果、「役に立った」が68.4%と最も多く、「まあ役に立った」が28.9%、

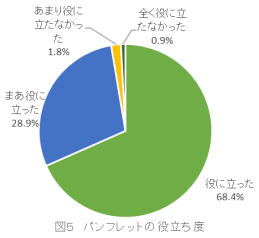

図5 パンフレットの役立ち度

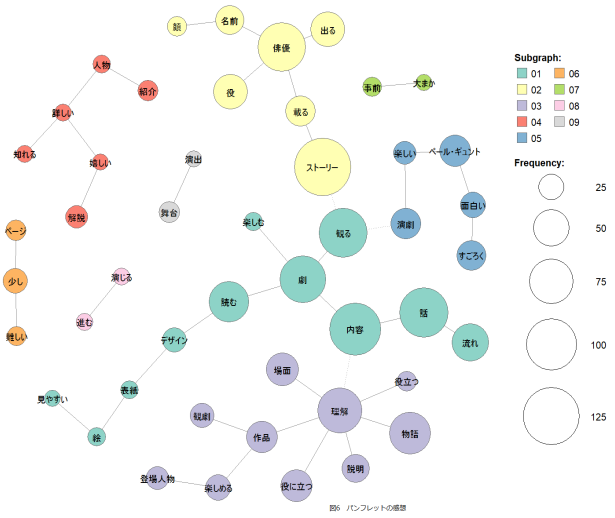

図6 パンフレットの感想

「あまり役に立たなかった」1.8%、「全く役に立たなかった」0.9%の結果であった（図５）。97.3%もの生徒がパンフレットは観劇に役に立ったと考えていることがわかった。

＜パンフレットの感想＞　共起ネットワーク（図６）による抽出語の関連性から次のような内容が明らかになった。①パンフレットを読むことで劇の内容や流れがわかり、より楽しむことができた。②俳優の名前や顔、配役が掲載されており、より興味がもてた。③作品理解に大変役に立った。④鑑賞後の振り返りに役立った。⑤デザインが可愛く見やすかった。絵や構成もとてもすばらしいと思った。

（５）教員の調査結果

鑑賞事業に参加した感想を５件法で回答を求めたところ、「よかった」が 53.6%で最も多く、「とてもよかった」が34.8%、「ふつう」が8.7 %、「いまひとつ」が2.9%であった。教員の約９割が観劇体験を肯定的に捉えていることがわかった。

さらに、教員のみを対象とした設問「観劇体験の生徒への効果」について、共起ネットワーク（図７）による抽出語の関連性から次のような内容が明らかになった。①感じたことを理解しようとしたり考えたりし、自分を見つめ直すことができる。②舞台芸術に触れる貴重な経験である。③演劇の世界と関わっている人の存在に気づくことができる。④表現することの必要性と、伝えることの大切さを知ることができる。⑤感性を刺激し豊かにすることができる。⑥想像力・表現力の向上に結びつく。⑦本物の舞台を肌で感じ味わえる数少ない体験となっている。

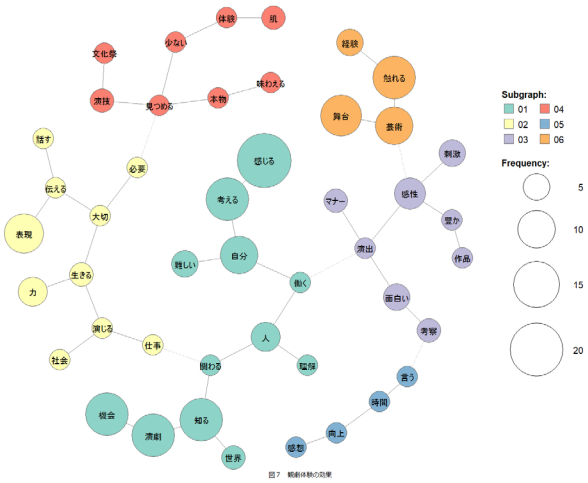

図7 観劇体験の効果

４　研究の成果

１）当初の計画

ＳＰＡＣが展開する事業のうち、「中高生鑑賞事業」、「おはなし劇場」、及び「すぱっく親子小学校」を調査の対象としていた。

２）実際の内容

Ｂ：一部修正

理由：「おはなし劇場」及び「すぱっく親子小学校」については、研究調査期間に事業の開催が見込まれなかったため、調査対象とすることができなかった。

３）実績・成果と課題

ＳＰＡＣの人材育成事業の成果について、「教育機関としての取り組み」の観点から中高生鑑賞事業に焦点を絞り、調査・分析を行った結果、生徒、教員ともに約９割が鑑賞体験を「とてもよかった」、「よかった」と肯定的に捉えていることがわかった。ＳＰＡＣの「本格的な劇場等における優れた舞台芸術鑑賞の機会を提供する」という目的は、参加者に認められ、高く評価されているといえる。その理由に最も多く挙げられたのは、生の舞台から伝わる迫力であり、俳優の演技や声に代表される表現の技術、間近で見る舞台や道具などを用いた様々な演出に対する驚きであった。また、その印象は、演劇公演というプロフェッショナルの仕事に触れる機会によってもたらされたことがうかがわれた。生徒は理解できない部分を抱えながらも、俳優の表情、動き、声や衣装の変化、場面の展開とそれらに合わせて変わる音楽など、目の前で繰り広げられる舞台芸術の世界に引き込まれていったといえる。

さらに、「鑑賞後に他の演劇作品を見てみたいと思った」、「実際に観に行った」という回答から、本事業によって演劇に対する興味が深まり、意識と行動の変化をもたらしたことが確かめられた。

森田（2004）は、同じ空間で同じ演劇を観る演劇鑑賞教育の意味を次のように示している。①感じる、②考える、③共有する、④違いを認め尊重する活動の保証、⑤見えるものから見えないものを観る力[2]、である。本研究のアンケート調査、及びインタビュー調査の結果、演劇公演における様々な要素は、参加者の五感に働きかけて多様な気づきをもたらしており（「感じる」）、物語や登場人物について自分と重ね合わせながら人生や意味を考える機会となり（「考える」）、鑑賞後には友人や家族と演劇に関わる会話をし「共有する」機会であったことが確かめられた。「違いを認め尊重する活動」であることは、鑑賞後の「自分なりの答え（視点）」、「想定を超えた発想・感想を抱く生徒」、「人それぞれの解釈」などといった回答から保証されていることがうかがわれる。つまり、ＳＰＡＣの中高生鑑賞事業は、演劇鑑賞教育の意義を実現しており、感性を刺激し、豊かにする体験として「見えるものから見えないものを観る力」を養い、想像力と創造力を培うものとして生徒に影響を及ぼし、その成果をあげている。

今後の課題としては、演劇に対する肯定的な印象が鑑賞後の意識と行動を変化させ、観劇機会の増加に結びついていることについて、より確かな検証結果が必要であろう。観劇の機会の増加、つまり、観客数の増加は、静岡県が目指した「世界に通用する舞台芸術の創造と舞台芸術の発展に必要な人材育成」の一端となり、「舞台芸術のすそ野の拡大」に結びつく。今後、検証が進めば、公立舞台芸術劇団ＳＰＡＣの存在意義を明確にする１つの重要な指針となろう。

４）今後の改善点や対策

本研究においては、これまでＳＰＡＣが実施してきたアンケートのデータ分析を行ったが、定量テキストの分析方法については課題が残った。貴重なデータを有効に活用するためにも方法を再検討する必要がある。今後は、蓄積されたデータを縦断的に検証し、本研究とは異なる視点から人材育成の成果を明らかにしたいと考えている。

５　課題提出者への提言

パンフレット（図８）や観劇する学校の特色をとらえた開演前の説明、観劇後の見送り（図９）等が生徒に大変好意的に受け止められていた。今後も教育としての観劇体験であることをふまえ、中高生のための丁寧な対応を継続されたい。また、演劇の魅力の一つでもある迫力を生む大きな音や声、また、暗い場所などに抵抗がある生徒の存在がある。これまでの事前聴き取りをさらに丁寧に実施され、今後も合理的配慮を要する様々な生徒に対して柔軟な対応を進められたい。

図８ パンフレット

図９ 公演後に生徒を見送る様子

６　課題提出者からの評価

ＳＰＡＣにおいて、人材育成は事業の大きな柱の一つであり、特にそのなかでも中高生舞台芸術鑑賞事業は、「劇場は世界を見る窓である」という理念のもと、20年近く続けており、昨年度までに20万人を超える中高生が鑑賞している。反面、観劇料は無料の上、学校から劇場までの生徒移動のための往復バスもＳＰＡＣ負担で手配しているため、事業実施にあたっては大きな支出を伴っていることから、それだけの成果を得ているのかという疑問に応える必要があると考えていた。しかし、これまで鑑賞者へのアンケートは実施してきたものの、具体的な成果についての検証は行って来なかったので、今回のようなアンケートの自由記述の定量テキスト分析は貴重なものと受けとめている。ただ、人材育成事業なので、演劇鑑賞者にとってその後の成長に観劇がどんな影響を及ぼしたのかということについて、長いスパンでの検証が出来たらとも思っているが、それは今後の研究を待ちたい。（公益財団法人 静岡県舞台芸術センター 事務局 総務課長 小田益秀）

---

[1] 市橋久生、『演劇と教育』68(6)「今こそ演劇鑑賞教育を ： 改めて今日的意義を考える」日本演劇教育連盟 編、2021年、pp. 29-31

[2] 森田勝也、『児童・青少年演劇ジャーナル「げき」18』「演劇を観る意味とその取り組み～観る力、創る力を育てる演劇鑑賞教育～」、児童・青少年演劇ジャーナル編集委員会編、2017年、pp. 74-77